

小人閑居して……

曾 根 敏 夫

(通 研)

1981年に工学部教授から電気通信研究所教授に転じ、1999年3月に東北大学を停年退官した。翌4月からは、新設の秋田県立大学システム科学技術学部勤務し、2006年3月に定年退職して現在に至っている。都合、大学には43年間籍を置いたことになる。退職して、3年目にはいった今、仕事といえるほどのものはなく、不善はなさないまでも、閑居している状態である。専門は音響学であるが、この関係で現在残っている仕事は、学会関係以外、某市の環境審議会委員と、かつての教え子の論文を見てやることぐらいである。かくてはならじと手を出し始めたのが、旅行、コーラス、ハーモニカ、川柳等である。

1. 旅のこと

旅は楽しいものであるが、在職中の出張では、観光はご法度であったため、外国出張が多かったにもかかわらず、観光地には疎い。かつて訪れたことのある国も含めて、熟年の旅(?)を楽しんでいる。国内も然りである。殆どの場合、旅行社の企画ツアーに参加して出かけるのであるが、料金の安さには驚かされる。年金生活者にとってはありがたいことであり、歩行に支障がない限り、旅を楽しみたいと思う。最近の旅で印象に残っているのは、ロマンをかきたてられるギリシャの旅やドイツの田園の美しさである。ヨーロッパ各地に残るギリシャ・ローマ時代の円形劇場は、周囲に騒音さえなければ、音響的には、今でも十分通用する野外ホールであることに驚かされる。

2. コーラスのこと

口の悪い知人から、「じじばばコーラス」と揶揄されたが、私が月に3回ほど参加しているグループも高齢者が、しかも女性が圧倒的に多い。したがって、女声合唱に男性が交ぜていただく格好であるが、声を出す機会があることはうれしいものである。学生時代に参加していた合唱と本質的に違うところは、難曲に挑戦したり、他人に聴かせるための合唱ではなく、自分たちが歌って楽しむことを目的にしている点である。したがって、曲も難しい曲ではなく、唱歌や童謡、簡単な歌曲などである。

3. 川柳のこと

川柳なら気軽につくれそうな気がして、川柳教室に通うことにした。特別に川柳の技法を習うというわけではなく、心に浮かんだこと、感じたことを5・7・5にまとめて先生のコメントをいただくだけであるが、いつも推敲が足りないと感じている。しかし、他人の心に訴える句をつくらうという意気込みはなく、自分の心の動きを記録する、いわばメモの類と割り切っているので、進歩はおぼつかない。

い。新聞や雑誌に投稿すると、どうしても他人の目に媚びた句になるような気がして、つい自分の殻に閉じこもってしまう傾向がある。始めて間もないので、もうしばらくは続けてみたいと思っている。

4. インフラとハイテク

騒音問題は、私の専門に属しているので、長い間、環境関係の各種委員を務めてきた。これは、社会奉仕の一つと心得て務めてきたが、継続年数や年齢の制限があって、現在は前述の一つの委員しか残っていない。困ることは、若手で騒音問題に取り組む者が極めて少なく、遠からず後継者難になるだろうということである。このような仕事は、研究という立場から見れば、必ずしも先端技術の研究と結びつくものではなく、後進がその気になってくれなければ、押し付けるわけにもいかない。しかし、騒音問題への対処は、ローテクであっても、世の中には欠かせないインフラ的技術である。カナダのマリー・シェイファーは、学生の騒音への興味を引くためにいろいろ考えた挙句、サウンドスケープなる概念に思い至ったということ、私が聴いた講演の中で述べている。しかし、サウンドスケープとかサウンドアメンティという言葉が流行し始めると、問題は騒音から遠ざかる方向に動き出して、必ずしもインフラに結びつかない。ハイテクではないにしても、地域社会に不可欠のインフラであることを認識して、興味を持ってくれる若者が少しは出て来ることを願っている。

